

美容の社会学序説

——美容行為の性差——

飯 島 伸 子

はじめに

現代は若者の時代であると言われる。ファッション、メイク・アップ、音楽、スポーツ、雑誌、文庫本、車、レジャー、旅行、嗜好品、インテリア用品、身のまわりの用品、どのひとつを取っても、流行を仕掛ける側は的の中心をびたりと若者にあてている。若者層の購買力の大きさがこの流れの確かな裏打ちとなっている。少し前までは、「若者の国」の代名詞を冠されるアメリカの現象であったものが、今や、なにごとにおいてもアメリカの後を追うわが国に現出するに至ったと見ることもできる。

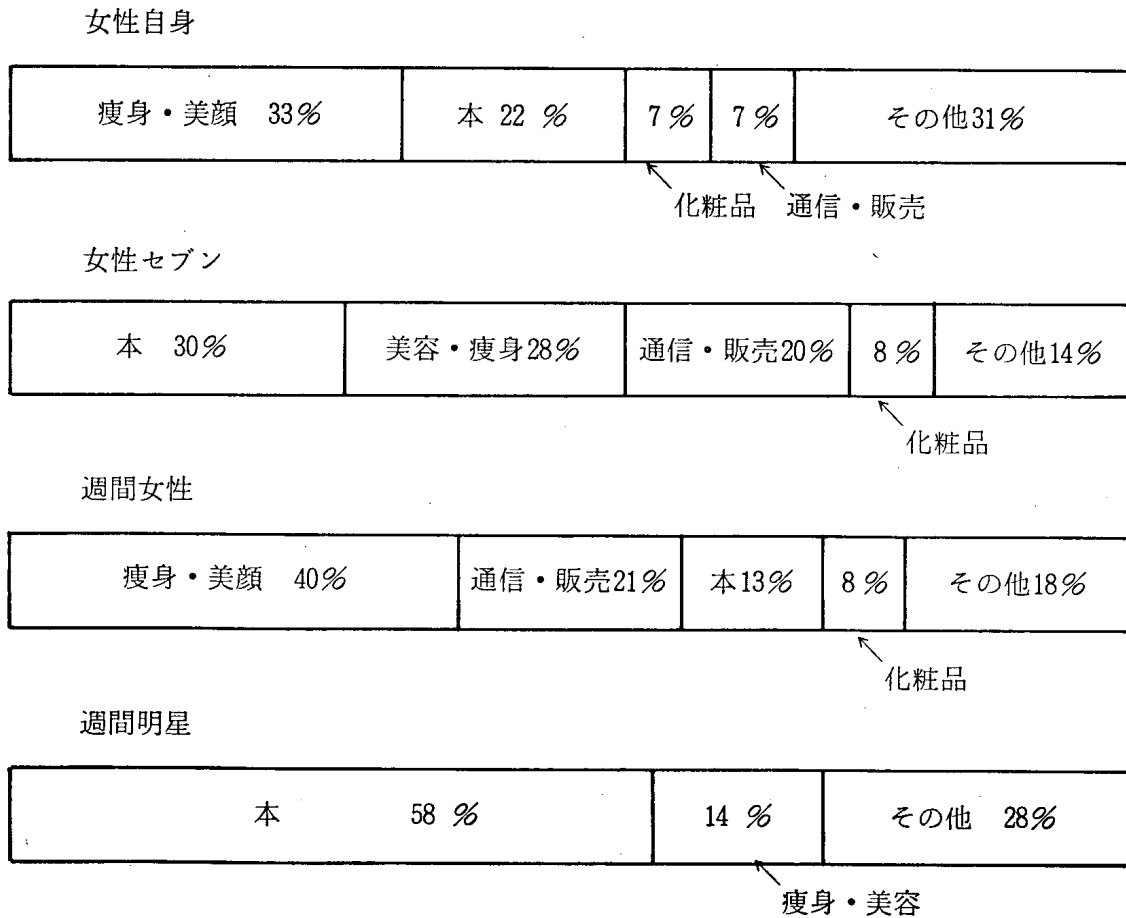
今風の商品の恰好の受け手となって日本経済を支えている若者層が、現代日本文化の中心的存在となっている現象は、まさしく下部構造が上部構造を規定する姿である。経済も文化も若者がおさえているとなると、その結果として生じるのは、イメージとしての「若さ」に適合しないさまざまな現象や行為、企画などが周縁部においやられる事態である。重厚で古典的な考え方は「古い」あるいは「野暮」と片づけられ、若者受けする軽さ、面倒の無さが歓迎される。問題提起型、論争型の生き方は前者に属し、若者たちに忌避される傾向があることから、学生運動や労働運動をはじめとする大衆運動は低下の一途を辿る運命におかれている。

しかし、こうした一連の「若さ信仰」の動きの中でもっとも顕著であるのは高齢者に対する考え方、扱い方の変化であろう。儒教精神が叩きこまれて

いた戦前に遡る必要もなく、戦後も高度経済成長期を経るまでは、年輩者は若者にとって人生の先達であり、社会的な枢軸であった。頼り、学びとり、あるいは闘って打倒する高みにある存在であった。国民総生産力の急速な伸びが経済的な豊かさを保証し、その豊かさが安定してみえるにいたった時期を境に、年輩者の社会的な位置づけに変化が生じた。寿命の伸びにともなう高齢人口の増加傾向、若年人口の肩にかかる高齢人口扶養の負担の大きさなどが指摘され、「老い」が「若さ」と対立するマイナスの価値であるかのようならえかたが広まり、強まった。

こうした傾向は、必然的に、若さを保つ、あるいは老化を表面化させない文化の形成に結びついてゆく。もっとも目立つ動きは美容領域に見られる。エステティック・サロン、肥満解消、シミや皺とりの薬品や器具、禿頭や白

図1 女性週刊誌4誌の広告内訳比較 (1987年10月5日現在発売分)



出典：『あさひびーぶる』こうや・泉北版157号

髪への解決法、若く見せるメイクとファッション、さらには体力強化クラブなどが喧伝され、美容をめぐる状況は「若さ信仰」と切り離しては語ることができない面を備えてきている。例を示そう。図1は、1987年10月5日現在発売中の女性週刊4誌の広告の内容を分析したもの¹⁾であるが、痩身・美容・化粧品広告が高い比率を占めていることが指摘できる。ここにとりあげられている女性週刊誌のうち、『女性自身』、『女性セブン』、『週刊女性』の3誌は30代から50代までの主婦層に購読者が多く、『週刊明星』の購読層はこれより年齢層が低くなるということである²⁾。30代から50代の主婦層が痩身・美容や化粧品業界のターゲットになっている実態を示すひとつの資料だと言える。

いっぽう、美容と言ひ、化粧と言へば、わが国においては女性の行為とみなされてきたが、1980年代には、男性化粧流行の兆しがあり、年輩者の熱心な若さの維持努力とともに今日の美容環境をめぐる特色となっている。

さて、本稿は、〈美容の社会学序説〉と題した。筆者は、環境問題の研究の一環として美容師の労働環境の問題を調査し、美容師に職業病が存在すること、その要因としては長時間労働、不規則な労働形態、不自然な作業姿勢、有害な薬品の使用のあることを指摘した³⁾。働く美容師に有害な薬品は顧客にとっても程度の差はあれ有害なものであるとの推測にもとづいて現在は顧客調査を実施中であるが、これらの調査研究の過程で、髪をいためてしまうのを承知で強い薬品を使って毛染めをしたり、ちぢらせたりする行為が商売として成り立ち、しかも長く継続しうることの社会的、歴史的背景に関心を持ったのである。人間の、美しく、若く見られることへの願いが少々の髪への傷みなどは見逃させたということであろうが、それでは、それほどに美容行為（髪や顔、あるいは身体全体を美しくするためのさまざまな試みや行為と定義しておきたい）に魅力を与えているのは何なのか。いつのころからの行為なのか。女性の社会的地位や役割との関係、権力との関係、宗教的行為との関係、ファッション史や伝統的文化など文化史との関係、マス・メディア

の報道内容など情報環境との関係、外国との比較など、アプローチの視角は多様にある。本稿では男性の化粧行為の出現が話題となっている折でもあるのでこれら多くのアプローチの中から、まず、美容行為と性差の関係についてとりあげることにしたい。

1. 男性における美容行動

① 1980年代

美容行為としては、冒頭に例示したように、身体のシェイプ・アップ、とくに瘦身努力のように全身について行うものと顔に焦点をあてるものがあるが、身体を単位とした美容行為という発想がわが国で重視されるようになったのは、西欧文化が導入された近代以後のものである。美容行為の代表的なものは歴史的に見たときには顔の化粧であり、一般的には女性に特有のも

資料1 朝日新聞1985年4月23日付け

オトコも今や化粧

口紅・まゆ墨…
 職場へ、学校へ
 ラリーマン(四〇%)が中心
 で、自営・自由業も一六%。
 動機は「健康的になりたい」
 「男のメイクに興味があった」
 「変わった気分」「人より自立
 したい」など「変身願望」が庄
 厳的。使い道は①ティスコやパ
 ーティーに行く(四〇%)②学
 校や職場に行く(三九%)③テ
 ート(三四%)④二日酔いの翌
 日の病後などに顔色をよくする
 (二二%)⑤商談、入社面接
 用(七%)など⑥重複回答⑦た
 った。

何と中年まで 「自立したい」

男性用の口紅、まゆ墨、ファンデーションが、たびたびメーカー在庫切れになるほどの人気だ。買って行くのは学生や若いサラリーマンが中心だが、メーカーの調査によれば三十代、四十代も少数ながらいるという。「デートやパーティー」だけでなく「職場、学校」へもメイクして出かけるのだそうだ。

売られている化粧品は、チューブ入りファンデーションが褐色から濃い茶色までの三色で「健康色」「日焼け色」などと名付けられている。まゆ墨は鉛筆式で黒。「男らしい口もとをつくる」口紅は赤、茶、ベージュの三色。昨年に発売されたが、値段はいずれも千円前後で、一般の女性化粧品よりぐんと安い。

男性用ファンデーションは、外資系化粧品会社などでも以前からつくっていたが、茶一色程度。「男の化粧」をはっきり掲げたのは「業界初」の冒險だっ

たが発売後三カ月で大都市を中心に四十八万個と「予想の二倍半の売れ行き」(小林コーセイ ㈱本社・東京)。すでに数回品切れになり、追加生産するほどだった。

小林コーセイが、購入した男性五百人を対象にアンケート調査(三月)した結果によれば、買ったのは二十代が五九%、十代二五%、三十代九%、四十代も七%いる。学生(三五%)とサラリーマン(四〇%)が中心で、自営・自由業も一六%。

動機は「健康的になりたい」「男のメイクに興味があった」「変わった気分」「人より自立したい」など「変身願望」が庄厳的。使い道は①ティスコやパーティーに行く(四〇%)②学校や職場に行く(三九%)③テート(三四%)④二日酔いの翌日の病後などに顔色をよくする(二二%)⑤商談、入社面接用(七%)など⑥重複回答⑦たった。

紳士服売りの場の一面に男性客向けの化粧品コーナーを設けた百貨店によると、「顔に立体感を出すため」濃淡二色を買った人もいる。また、「流行のバステル調のシャツには青白い顔じゃ似合わない」とファンデーションを買って行く高校生もいるという。「スキーやゴルフの日焼けムラを隠したい」と中年が相談をもちかけたたりもするそうだ。

のと見做されてきた行為である。その傾向に、最近、変化が生じてきた。

ここに紹介した新聞記事（資料1）にあるように、最近では、化粧は男性にも見られる行為なのである。男性用の口紅，まゆ墨，ファンデーションが在庫切れをくりかえすほどの売れ行きを示し，購買層は若者が中心ではあるが，30代，40代の男性も少しはいるということである。化粧の理由としては，他人に差をつけるためや健康でいい男に見られたいという願望，ファッションに合わせた顔色づくりや日焼けムラを隠すためという積極的なお洒落行為などのあることがわかる。

新聞記事からもうひとつ。前掲の記事より1年半あとの記事（資料2）である。

ここでは，前回の記事にくらべて，男性の化粧行為を珍奇な現象とみる姿勢は弱くなっているのがわかる。男性の化粧行為は一部のひとびとの間ではすでに定着しつつあるようである。とはいえ，それはまだまだニュースになる少数者の行為ではあるし，賛否両論がとびかう話題である⁴⁾。

資料2 朝日新聞1986年10月5日付け

毛づくろい		
<p>バック。皮膚に潤いを与える化粧品である。普通は白か透明。この夏、ある会社が、男性用に黒いバックを売り出したところ、爆発的な人気。20歳前後の若者が、デパートのコーナーに行列。10日間で20万個を売りつくし、一時は買いたくても買えないほど。「男らしさを黒で表現したのがあった」とメーカー。</p> <p>男性化粧品といえば、整髪料かせいぜい、ひげそり</p>	<p>男が化粧して</p>	<p>あとのローションぐらいしか浮かばないのは旧人類。いまや頭髪、顔、ボディそれぞれに何種類もある。大阪にオープンしたホテルの「エステティック・サロン」は男の全身美容が売り物。1回4万円。結構はやっている。</p> <p>大阪のコミュニティー新聞「御堂筋」が独身OLに「理想の夫」をアンケート。結果は、「やさしい人」「ユーモアのわかる</p>
	<p>優しくなるか</p>	<p>人」が、「経済力」や「知性」を圧倒。タレントなら、明石家さんまのイメージである。</p> <p>花嫁予備軍。ある結婚式場では先を見越して、セールスレディーたちが17、8歳の娘さんのいる家庭を訪問。式、披露宴、ハネムーンまで一切をせひ、というわけだ。「男性のお宅には行っても無駄。決定権はお嬢さんの方にあるんですから」</p>

② かつて化粧は男性の行為であった

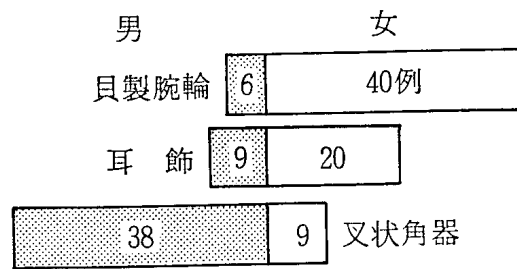
男性の化粧がマス・メディアに話題を提供しているのだが、歴史的には、男性はある時期から化粧をしなくなったのである。

たとえば、風俗史家の樋口清之氏は、石器時代から古墳時代にかけては、化粧は男性に圧倒的に多く、女性で化粧をしていたのは神事の従事者あるいは身分の低い層に限定されていたと述べる⁵⁾。樋口氏の調査の方法は埴輪や人骨など出土品を根拠としたものであり、男性はおもに赤化粧といわれる赤色を塗りつける行為をしており、石器時代では身体全体に赤色を塗っていたのが古墳時代には主として顔への部分化粧になってきたということである。縄文時代の人骨から得られる情報には美容行為と密接に関連する装飾品についての情報もある。考古学者佐原真氏は縄文人の死者が身につけた装身具について調べているが、腕輪と耳飾りは女性、又状角器（さじょうかっき）と呼ばれる鹿角製品は男性に多いと紹介し、図2を示している⁶⁾。

縄文人については、一部の男性が又状研歯という上前歯をとがらせる加工をしていることも発見されている。これも化粧行為の一種とみなせるが、この人骨は考古学者間壁葎子氏によれば、「このような歯を持つ人物には、特別の畏怖を感じたと思われ、集団の中でも特殊な立場の人物と見てよいだろう⁷⁾」と分析されている。この人骨は、首飾りや耳飾り、足環までも身につけていて集団の中で高い地位にあったと考えられるが、歯の加工は身分と関連する美容行為ととらえられよう。こうした例からすれば、縄文時代に男性の中にアクセサリーを身につけ、身体や顔に装飾をほどこす習慣があったことは確実だといえる。ただ、そうした美容行為が、樋口氏が指摘するように男性に圧倒的に多かったかどうかについては判断を保留しておきたい。と言うのは、山梨県北巨摩郡高根町で出土した縄文後期のものと言われる女性土偶に、顔と上半身が朱で塗られ、大きな耳飾りをつけ、両肩にはいれずみとも見える10個以上の穴がつけられているものがあり、女性に化粧行為があった可能性も捨てきれないからである⁸⁾。

樋口氏の古墳時代の化粧に関する指摘は、3世紀の日本について外国人が記述したものからあるていど裏付けられる。すなわち、3世紀に中国で著された『魏志倭人伝』⁹⁾には、女王卑弥呼の支配する邪馬台国から約5万キロ

図2 縄文人死者の身につけた装身具の男女差



出典 佐原真『大系日本の歴史1日本人の誕生』217頁

南にある国では、男性が全員、大人も子供も、あるいは身分の上下にかかわらず、植物繊維（木綿—ゆう）を頭にまき、髪をみずらに結び、顔にも身体にもいれずみをしているとの記載があるが、女性については髪を髷に結っていたとあるだけで化粧あるいはいれずみについての記載はない。いれずみは、魚介類をとる際に鮫などを避けるためであるとも述べている。また、倭の地（卑弥呼の支配する邪馬台国と解釈する）では、ひとびとは中国で粉を使っているのに似て、朱丹を身体に塗っているとも記載されているが、男女の別については触れられていない。

他方、5世紀の『後漢書』の日本について触れた個所には、男性のいれずみに加えて女性が紅化粧をしていることが書かれているのだが、石原道博氏の解説では、同書の日本に関する記述のほとんどは、『魏志倭人伝』の内容にもとづいたものだということであり、それが正しいとすれば、『魏志倭人伝』の朱丹を身体に塗るとの記載を女性の紅化粧に書き替えたということも考えられる。

こうした記述をまとめてみると、3世紀前半の女王卑弥呼の支配する邪馬台国では、ひとびとが身体に赤色を塗っており、もっと南の漁労を主とする地域では、目に触れるほどの男性は、例外なく顔にも身体にもいれずみをし、髪にはヘア・バンドのようにかずらを巻き、髪型はみずらに結っていたのである。女性は、一般的には、髪を髷などに結ってはいたが顔や身体への化粧はせず、神につかえる職分の女性だけが、神事の際に顔の部分に赤色を塗

る独特の儀式用、宗教上の化粧をしていたと考えられる。

さて、風俗史家の江馬務氏は、「古代（江馬氏の意図としては神后皇后の時代まで——飯島注）には化粧はなかった。顔に赤土を塗る風習（埴輪にその例がみられる）があったが、これは俳優（わざおぎ・物まね狂言）の時にしたことで、倭民族は顔に塗ることを忌んだ。辺海の民は入墨をする風があったが、これは刑罰にしたことで、倭民族のこのまなかったことが知られる」¹⁰⁾と述べて、古墳時代のひとびとの化粧行為を全面的に否定する。発言の根拠となる資料は示されていないのだが、検討してみる必要はある。江馬氏の指摘にある倭民族を、大和王朝のひとびとと解釈するならば、江馬氏の指摘は、邪馬台国のころにはなされていたいれずみや朱丹によるボディ・ペインティングが、神后皇后の時代（4世紀後半）には否定的な価値を付されるに至った、と読める。

短期間にひとつの文化的な行為に正反対の評価が下されるようになる事態は、異なる文化のにないてが支配者になり、被支配者の間に流行していた風俗や習慣——この場合はいれずみや赤化粧——を野蛮で下品な、下層の人間の行為とみなした場合に生じる。『魏志倭人伝』によってひとびとが中国の粉を塗るのに似て、身体に朱丹を塗っていたと記述された邪馬台国は、卑弥呼の死後、宗女の台與（とよ）が女王となって治めたが、台與の時代か、それともそののちの男王の時代かに侵略されて消滅している。その南国の熊襲と思われる国も、伝説では大和王朝から派遣されたヤマトタケルによって滅ぼされている。江馬氏の指摘が正しいとした場合、『魏志倭人伝』に登場した日本の国々は違う文化の持ち主、つまり、日常的にいれずみや赤化粧をする習慣の無い民族に滅ぼされたということになる。現に、邪馬台国が歴史の舞台から消えたころに、大和地方に強大な勢力が形成されているが、ここでは男性にいれずみの習慣はない。こののちのいれずみ化粧は、マイノリティ・グループの行為となっていったと考えられる。

赤化粧も、神事に従事する巫女など特別の人間の行為に限定されて残った

と考えられる。江馬氏の指摘が意味する事象を、筆者としては以上のように解釈しておきたい。

2. 輸入された女性化粧と男性の白粉化粧

飛鳥時代になると、女性の間にもなんらかの化粧行為が見られるようになった。持統天皇の時代に中国の白粉が朝鮮経由で日本にもたらされているが、女性の化粧行為が習慣化したのは692年に国産の白粉が製造されて以後のことだと言われる¹¹⁾。持統天皇に白粉が献上されたのは、天皇が女性だったからであろうが、このころ、中国でも女帝・則天武后が実権を握っている。中国ではすでにさまざまな技巧をこらした化粧をするのが、女性の当然の行為となっていた。当時の日本にとって、中国はあらゆる面において渴仰の対象であったことが、中国の女性の熱心な化粧行為を日本の女性に取り入れさせる動機となったと考えられる。女帝や宮中の女性たちは率先して中国の上流婦人たちの化粧を模倣したことであろう。

奈良時代に入るとその傾向はピークを迎える。正倉院宝物の「樹下美人図（鳥毛立女屏風）」に見られるような唐の化粧法の眉を補正して「蛾眉」と称する型に整える化粧法や同じく顔面全体に塗る白粉をベースにして、頬には紅をぼかし、額や唇の両側に紅や青で模様を描く華やかな蛾眉豊頬の化粧法が流行し¹²⁾ており、極端に技巧的になっている。かくして、少し前までは男性の行為であった化粧行為は女性の行為にもなったのである。しかし、両者は、同じ化粧という言葉で表現するのをためらうほどに、その方法においてことになっている。それまでの男性の化粧が荒々しく逞しさを伴う黒化粧系統のいれずみや赤い隈取りをする赤化粧系統であったのに対して、大陸からはいつてきた女性化粧は、白粉を基礎とする白化粧であるとともに、紅や青のスポット化粧や眉づくりなどの繊細な技法を駆使している点で著しく異なるものである。

平安時代は、遣唐使が廃止されたことで文化の日本化がはかられた時期で

ある。「身取り」の長さの黒髪、十二単衣、室内での膝行などを上流階層の女性に強制した時代であり、装いから見ただけでも、女性の自由がもっとも束縛された時代であるが、化粧も、薄暗い室内に閉じ込められた境遇に適合する白く塗りたてる化粧が流行している。眉づくりも、顔の白さを強調するために、全部抜いて白粉で塗り込め、額に別眉を描くようになる。化粧がこの時代の宮中の女性にとって楽しい行為になっていたことは、平安時代の随筆集『枕草子』に、「こころときめきするもの」として、髪を洗い、化粧して、着物に香をたきこめる行為が挙げられていることからもうかがわれる。一方、女性の極端に人工的な化粧や装いに歩調をそろえるように、公家・貴族階層の男性の化粧や装いも豪華になり、女性同様に顔面を白く塗りたてる行為が広まる。男女ともに、厚く塗った白粉がはげおちるのを避けるために、口を大きく開けて話すことも、笑うこともしなかったといわれる。そういう意味で、化粧した姿は白日のもとにさらすべきでなかったことは、『枕草子』にみぐるしいものとして、化粧をした顔が全部現れる様子を批判していることから推測できる。

この時期を象徴する文学のひとつである『源氏物語』には、随所に、当時の女性にとっての理想の男性像と見做される姿が展開されている。玉上琢彌氏は、『源氏物語』の主人公の光源氏は「男装の麗人」であり、男らしい男とは決して言えない、男にとっても女性の代わりになるほどに女らしい男性だと規定する¹³⁾。

女性にもみまがうほどに光り輝く白色の顔容をして、衣装にもすみずみにまで気を配り、香をたきこめているような男性を理想として描いているのだが、現実の貴族の男性の白く塗りたてる化粧や、衣装に焚きこめた香、なよなよとした身のこなし、物言いなどが、紫式部にとって好感をもって見られたのか、それとも嫌悪を持たれていたのかは微妙なところである。ともかくそうした見本に磨きをかけて彼女は光源氏を創造したのである。

なお、男性には白粉化粧の他に、あごひげや口ひげを蓄える習慣があった。

これも美容行為と考えるとよいだろうが、『源氏物語絵巻』（12世紀前半）の中の晩年の光源氏や『伴大納言絵巻』（12世紀後半）における検非違使、『信貴山縁起絵巻』（12世紀後半）における馬上の烏帽子姿の男性などにみかけられる例である。若い男性には無いところを見ると、ひげは、若い男性には似つかわしくないとみなされていたのであろう。

こうして平安時代は、装いや化粧の視点からすれば、「男装の麗人」的な男性がもてはやされ、上・中流階層の女性たちは、そうした女性的な男性に隷属させられ、華美に装い化粧することに人生をかけているような時代である。古墳時代はおろか、飛鳥時代とさえ大きく様変わりしてきている。

ところで、これまでにとりあげて来たのは上流階層を中心とした化粧行為であったが、それでは庶民の化粧行為はどのようなものだったのだろうか。上流階層の人々についての記録に比較して庶民に関するものは非常に少ない。そうした中で『枕草子』にある次のような意見は大いに参考になる。すなわち、「暑げなるもの」として色黒の人が太って髪が多い様子、「見苦しきもの」として色黒の女性が鬘をつけ、ひげがちのしおたれた瘦せ男が夏に昼寝をしている様子、「非常に見苦しいもの」として、やせて色黒の人が絹の単衣を着た様子、「短くあるべきもの」として身分の低い女性の髪、逆に「人もなげなふるまい」としては宮中の女官の髪を上げている姿などが槍玉にあげられているが、色黒、不精ひげ、女性の短い髪などが身分の低い庶民にふさわしい装いと考えられていたことがよくわかる。庶民の女性は鬘をつけるのも身分不相応とみなされていたこと、絹など着るのはとんでもないと思われていたこと、逆に、身分の高い女官が垂れ髪でなく髪を結いあげるのも身分にふさわしくない行為とみなされていたのである。

同様に、絵巻の隅などに時折描かれているものから判断すると、上流階層のひとつとが、男女ともども衣装の華美さを競い、白粉を厚く塗り重ねて、身動きも不自由に不健康な生活をしてきた時代でも、庶民は、男女を問わず、髪型は労働に邪魔にならないものにし、化粧はほとんどせず、衣装も簡素な

ものである。たとえば、『扇面法華経冊子』（12世紀半ば）の中には、井戸で喉をうるおしている良い身なりの旅姿、垂れ髪で引目鉤鼻に描かれた典型的な上流の女性とともに、袖をたくしあげ、裾の短い衣服を着て足をにゅっと見せた、髪のない化粧気の無い洗濯女が描かれている。化粧は、庶民には縁のない上流階層の人間の行為だったのであり、庶民の女性は自らの生活をみずからの労働で支え、たくましく生きていたのである。

3. 鎌倉時代から江戸時代へ——化粧性差の拡大

男性の女性化、女性の男性への隷属が特徴的な公家文化の平安時代と対照的に次の時代は質実剛健さを標榜する。鎌倉時代の武家文化のもとでは、男性が白粉をぬりたてる化粧は公家・貴族にこそ受け継がれたものの、武士には敬遠された。女性の間でも、平安時代の壁塗りのごとく白粉を塗りたてる化粧は同じく公家・貴族をのぞいては影をひそめるが、色白を良しとする価値観はむしろ広まり、平安時代には宮中に限られていた白粉化粧が武家の婦人や遊女の間でなされるようになった。髪型は、平安期のひきずる程に長い垂れ髪は、活動に不自由であるため、宮中のものとしては残るが一般的には短めになり、部分的には結髪の傾向も現れる。

貴族の男性の白化粧は、鎌倉時代では貴族のみの行為となったが、室町時代には、公家文化の模倣が足利将軍を筆頭とする武士の間で積極的になされ、その一環として男性化粧が通過儀礼的な形で継承される。武士たちは、戦いに出掛けるにあたって白粉で顔を整えたのである。死出の旅への化粧を出陣時からしていたのであり、戦いを迎えて白粉を塗る行為は、欠くべからざる武士のたしなみであった。白粉を塗るだけではものたりず、眉を描き、口紅をつけ、お歯黒を塗る武士もあったという。13世紀の末に描かれた『蒙古襲来絵巻』や14世紀に描かれた『後三年合戦絵巻』では赤い唇に口ひげやあごひげを蓄えた武士たちの姿が見られる。

応仁の乱で京都が戦場になったことは、公家文化を中央において凋落させ

たが、公家たちが戦国大名を頼って各地に分散していったことは公家文化を地方に伝承する効果を持った。武士の出陣時の化粧は中心部ではこの時を境に見られなくなっているが、地方ではこののちも続いた。1590年に小田原城で北条氏を滅ぼした豊臣秀吉が、北条方の武士の首実験をしたときに全員が白粉を塗り、お歯黒を塗っていたのに「これでは男か女かわからない」と驚いたという¹⁴⁾が、これなどは、すでに紅・白粉と縁のなくなった権力者側の男性と公家文化を導入して戦時に化粧をしていた地方武士の姿の違いを示す良い例である。

長い戦乱の時代が終わり、町民階層が台頭してくるとともに化粧行為にも変化が生まれる。出雲のお国によって1603年に創始された歌舞伎が大きな人気を呼び、歌舞伎役者の髪型が女性の髪型に影響を与えて、200種に及ぶ髪型が考案され、女性の髪型は、宮中や大奥を除いて垂れ髪から結び上げる型に変化した。歌舞伎役者や有名な遊女を描いた浮世絵が出現したことがこうした傾向に拍車をかけている。女髪結が成立したのもこの時代である。化粧も庶民の女性に手の届くものとなった。江戸時代中期には、『都風俗化粧伝』と題した書物が発行されているが、これは、顔や手足、髪美容について細かく指導したものであり、ベスト・セラーとなっている¹⁵⁾。このころの浮世絵には、歌舞伎役者や遊女たちに混じって町娘や町家の主婦の髪を結び、化粧する姿も登場している。

しかし、浮世絵に登場する庶民の女性たちは、かつて絵巻物の片隅に描かれていたような化粧をしない庶民の女性のたくましさや健康さをもはや持たず、しどけなくなよなよと、あるいは内気に控え目に描かれている。湯女と称される浴場で客の身体を洗い、求めに応じて売春もおこなった職業の女性も浮世絵の主題になっているが、彼女たちの方が町娘たちよりも迫力を感じさせる描き方をされている。庶民の女性は髪を結び、化粧をする権利を得たのと引き換えに、男性に頼らずみずからの力で生きる権利を手放したのである。

江戸時代は、町民文化の興隆の他方で、上下の秩序や身分差を重んじる儒教思想を重視した時代であり、何種類もの『女大学』¹⁶⁾と題する女性を男性の支配下に位置づけた書物が発行され、その思想を寺小屋などの教育機関を通して社会のすみずみにまで及ぼした時代である。有名な、女子は父の家では父に従い、嫁しては夫に従い、夫の死後は子に従うべきとする女性三従の道や、「子無きは去る」を含む夫が妻を問答無用で離縁できる7つの理由を述べた「婦人の七去」や「男女7歳にして席を同じくせず」などの考え方はこうして普及させられた。女性は夫に離縁されないためには常に従順に従い、夫の気にいるように装い、化粧しなければならなかった。『女大学』と題した書物の中には、醜い女性が化粧をしすぎるのはいけないとか、化粧は派手すぎてはいけないなど差別的な表現もともなう細則が記されており、化粧行為もまた支配階層の管理のもとにあることを示している。

この時代には、男性の髪型も月代、丁髷が全盛期となり、多くの髪型が考案されている。女性も男性も多くの髪型の中から、自分の職業や身分、年齢などにふさわしいものを選んで結髪し、女性はさらに身分相応の化粧をしたのである。一見して上流階層の人か下層の人か、町人か武士か、未婚女性か既婚女性か、遊女か素人の女性かがわかるのであるから、人々は髪型や化粧という名刺を背負って歩いていたようなものである。

4. 近・現代の化粧行為——西欧風化粧法の輸入

明治天皇の16歳の即位式は白粉を塗って行われたというが、宮中に最後まで残った男性の白粉化粧も、文明開化の進行する過程で明治初期に廃止される。宮中外では、江戸時代には、祭などの特別の行事のとき以外は男性の白粉化粧は終焉していたと言われる¹⁷⁾。

明治期には男性は蓄ひげなどはしても白粉を塗る化粧はしておらず、髪型も丁髷から散髪スタイルに変えることで日々の日課であった結髪の作業からも解放され、和服を洋服に変えて服飾的にも簡素化していった。女性の方は、

それまで千年にわたって誇ってきたまっすぐで黒々として長い髪を最高とする美学をあっさりと捨てて、ウェーブをつけたりちぢらせたり、赤く染めたり、髪化粧にも凝り始める¹⁸⁾。髪をいじれば顔もいじらなければ気がすまなくなる。「婦人の化粧は贅沢でも奢侈でもなく、婦人に必要な務めのひとつであり、たしなみ¹⁹⁾」とか「美顔術はいやしくも交際社会に顔を出す婦人には必須²⁰⁾」、「齒に黒いニスのようなものを塗り直して、眉毛をすっかりむしりってしまった時には、あらゆる女性のうちで、人工的な醜さの点で比類のない程抜きんでている²¹⁾」など外国人による日本女性の伝統的な化粧法にたいする酷評もあって、西洋風の化粧法を身につけることが近代的な女性の条件であると思込まされてゆく。

こうした動きは、ちょうど、飛鳥・奈良時代に、進んだ文化を持つ中国や朝鮮の文化が怒濤のごとく流入して、中国や朝鮮の女性が紅・白粉で化粧していたことから日本の上流の女性の間と同様の化粧が流行し始めた経過を髣髴とさせるものがある。異なるのは、かつてはターゲットは上流階層の女性であったものが、今回は庶民も標的の範囲内に置かれている点である。上に引用した文献に、婦人の化粧は贅沢でも奢侈でもなく、必要な務めであり、たしなみであると題したものがあり、化粧行為がマス・メディアによって奨励されることが江戸時代よりもさらに露骨になっている。

西欧風の化粧や髪型は第2次世界大戦によって中断されるが、戦後にはいち早く生産を開始し、高度経済成長期を経た1962年には、化粧品業界の宣伝費用が年間133億円、出荷実績は1952年の149億円に対し634億円と30%余の伸び率を示している²²⁾。出荷実績はその後も伸び続け、1981年には8111億円に及んでいる。この間に、男性用の化粧品は戦後まもなくから10年間、整髪用のポマード類が中心だったが、1956年に三共製薬から化粧水、翌年にはウテナからクリームという風に肌につけるものが売られはじめ、1967年に資生堂が黒と銀のデザイン男性化粧품을23品揃えて販売したことで男性が化粧品市場の新たなターゲットとして登場させられる。この年はヘア・スタイル

にユニ・セックスの兆しが現れた年でもあり、男性が理髪店のカットを避けて技巧的な美容院に行く傾向が出てきた年でもある。この後、男性のロング・ヘア（1960年代末から70年代初頭）、男性パーマの増加（1970年代半ばから80年代）などヘア・スタイルにおけるユニ・セックス化が進行して、本稿のはじめに紹介したような1980年代半ばにおける男性の紅・白粉による肌化粧に至るのである。

こうして、1980年代の男性化粧の出現は、歴史をくりかえす形で現れた。さて、歴史的に、多くの男性の行為であったし、最近、再び男性の間にもその傾向の見られ始めた化粧行為が、女性の行為と思込まれていたのは何ゆえであろうか。そのことを知るためには、過去にわたって化粧行為の動機や目的を探る必要がある。

5. 化粧目的の男女差

① 古墳時代から戦国時代までの男性化粧の動機や目的

女性よりも化粧行為が圧倒的に多かったと指摘されている古墳時代の男性たちは、みずからの化粧あるいは身体装飾行為にどのような意味を持たせていたのであろうか。

古墳時代の男性たちのいれずみの目的を『魏志倭人伝』は、漁労に際しての危険防止のまじないであると紹介している。たしかに、当初はそういうことであったかもしれない。そもそもの始まりがどのようなものであったかは想像するほかないが、いれずみをしていた男性が漁に出た時に危険に出会って、九死に一生を得たということがあっていれずみが流行りだしたというようなことであったかも知れないのである。あるいは、一族の長であるような漁のうまい男性にいれずみ様のあざか何かがあって、それが広まっていったということかも知れない。ともかく、何らかのきっかけで、荒海での漁のためには不可欠の装飾行為となった。いれずみは、一旦、施したならば一生消えない。一生、彫物を肌につけていることが日常的な行為となった時点で、

いれずみ行為には他の目的が加わったと考えられる。同性にあるいは女性に力強く魅力的に見られたいという目的である。同性に対する場合と女性に対する場合では同じく力強く魅力的に見られたいというにしても意味は異なる。同性を意識した場合には力の誇示がより重要であったであろうし、女性に対しては、力強く、男らしく、かつ魅力的でありたかったであろう。朱丹の塗布についても同様の指摘が可能である。

男性が男らしくあるべきことがとりわけ強調されていた第2次世界大戦時には男の化粧行為などは恥ずべきことであったが、卑弥呼の時代には男のたしなみであった。何が、この二つの時代の男たちの化粧への姿勢を違わせているのだろうか。そのヒントは当時の女性の地位や能力にあるのではなからうか。たとえば、女王卑弥呼の存在がある。『魏志倭人伝』の記述に出てくる卑弥呼が邪馬台国で君臨したのは3世紀前半のことである。元来は男王が支配していたが国内に戦争がたえなかったので女王卑弥呼を立てて、その高い呪術能力で安定をはかったことが紹介されている。弟が彼女を補佐していたことも書かれており、女王が祭祀をつかさどり、男弟が政治をつかさどったとみなされている。内政は男性の弟に任せたとはいえ、中国との外交の表面には女王が出ており、祭祀・政治の両面の機能を備えた女王だったといえる。女王卑弥呼が3世紀なかばに没して男王が立つとふたたび国内には戦いが絶えなくなり、再度、卑弥呼の宗女の13歳の台與（とよ）を女王に立てて安定がはかられた。強豪の乱立による不安定な国情を2代にわたって女王が安定させ、強力な指導性を発揮したのである。

女性が強大な権力を有する時には、その支配下にある男性は相対的に弱者である。本来であれば、王になるのは男性であるのに女性の支配下に甘んじなければならぬ事態に置かれたことから、男性の優位性や強さを表現する助けとして化粧・装飾を施したり、あるいは現実の支配者である女王をはじめとする強い女性たちの意を迎えるための装いをこらしたことは考えられる。このように、男性の肉体的な魅力を権力者の女王を頂点とする女性たちの目

に印象づけたいとの欲求にもとづく化粧行為ということもありえたであろう。

ところで、すでに男王の支配の系統化が進んでいたと考えられるこの時期に、卑弥呼と台與と二代もの女王が擁立されたということは、女性に祭祀をつかさどる象徴的機能を与え、男性に政治機能をあたえる二重支配・ヒメヒコ制の延長線上の出来事とみるのが妥当との考え方もある²³⁾。ヒメヒコ支配制度は、政治的宗教的支配の兄弟姉妹による分掌体制のことであり、7世紀の天武天皇期に男性による一元支配が確立したことで消滅した制度であるが、すくなくとも、その時までは、男性の政治的支配がその姉妹の霊能力の発揮がなければ貫徹しなかったことを示唆するものである。一方で、当時の庶民の女性は、男性にまじって戦闘へも雄々しく参加していたことが知られている²⁴⁾。

男性による一元的支配が進行しつつあった時代ではあるが、女性は、いまだ活動的で強くて潑刺とし、あるいは呪術的能力を備えて権力を分掌していたのである。卑弥呼に象徴される強い女性の像は、当時の女性を代表する姿だったと言えるだろう。卑弥呼に対するときと同様に、強い女性に対する時の男性が、顔面や身体に彩色やいれずみをほどこして、女性に負けぬ強さを誇示すると同時に魅力的に見せようとしたことは容易に推測できる。男性の化粧が習慣になっていたのであれば、女性たちの目により美しく、より男らしく映るように顔や身体に細工するのは男のチエでさえあったであろう。女性の人権が極度に圧迫されていた第2次世界大戦期に、男性の間にお洒落を軽蔑する風潮があったことは、こうした視点からすれば生じるべくして生じた社会現象であったと言える。

ところで、樋口氏によれば、古墳時代の男性に見られたいれずみ行為は、呪術的な信仰から始まったものであり²⁵⁾、いれずみをすることにより、強い生命力を得られるという信仰があり、それがやがてはいれずみを魅力的で美しいとみなすように変わっていったのだという。ここでは、化粧行為に宗教的・呪術的意味が付されているのである。宗教的行事に専門的に従事した巫

女となると、儀式用の化粧は本格的なものとなる。巫女は、神事を行うにあたって、身体を徹底的に清めるとともに化粧をしていたことがわかっている。たとえば、古墳時代に用明天皇の皇女の酢香手姫は、15歳から37年間伊勢の齋宮（古代においては祭祀をつかさどる最高の地位）であったが、『齋王』の著者津田由伎子氏は、そのころの巫女の服装が京都の博物館で復元されているのをもとに、当時の巫女の装いを次のように記述する。「古代の巫女は、丹の顔料を頬の一部にぬり、麻の衣に、白たへの絹のたすきを斜めにつけ、鏡を手にとり持って、天つ神国つ神にひざまずき、伏して額づき祈ったのである」²⁶⁾。添えて紹介された復元巫女図は、両眼から顎にかけて呪術的な彩色をほどこし、呪術的な紋様の衣服をまとい、耳輪をさげた姿である。女性の巫女にとって、化粧は、独特の衣装とならんで神につかえるために不可欠の行為だったのである。

古墳時代の主として男性の、部分的には巫女など神事に従事する女性の化粧の目的は、①異性の目を引く②権威・権力の誇示③宗教的・呪術的必要性、の三点にまとめられよう。平安時代の男性の白粉化粧や香り化粧には、このうちの①と②の他に変身願望や、自己表現の機能をも化粧行為に与えていると考えられる。化粧のナルシズム効果である。さらに戦国時代の出陣時の化粧は通過儀礼としての機能の変形と見ることができる。男性の化粧行為の目的には、上記三点に④変身・自己表現の手段として⑤通過儀礼として、の二点を加えておきたい。

② 女性の化粧目的

すでに見てきたように、古墳時代までは、女性の化粧は一般的ではなく、飛鳥・奈良時代になって中国の影響で宮廷を中心に始まっている。平安時代になると、上流社会の女性は、どっさり重ねた化粧品と衣装とに押しつぶされて生きる事態となる。7世紀後半の天武天皇の時代を境に、それまでの血縁関係にある男女による政治・祭祀の分掌体制が消滅し、男性の女性に対する優位性が制度的に保証されたことが、化粧をめぐる男女の対応の逆転を作

りだすことの遠因となった。

『万葉集』に歌われた男女の相愛に関するおおらかであけっぴろげな態度は、平安時代の歌集や文学作品では抑制され、押さえられた態度へと変化する。以前には男女ともに、複数の異性との愛情の交換が社会的に許されていたものが、平安時代の、少なくとも上・中流階層では、男性にのみ許されることと変わっている。複数の女性が一人の男性によって養われることになれば、生存競争のためにも女性はみずからが他に較べてより魅力的で価値が高いことを示さざるを得なくなる。身動きをするのにも不自由な長すぎる髪、剥げおちるのを防ぐために笑うのも控えなければならないほどに厚くぬった白粉、かさばる十二単衣などの過剰な装いの成立には、それを好んだ支配体制・男性の意志が反映されているのである。

いったん、化粧によって男性の寵愛を競うことが習慣となってからは、女性はより上手に化粧することに腐心するように追い詰められてゆく。遊女の存在はそうした傾向に拍車をかけた。滝川政次郎氏は、遊女の出現は4世紀後半の応神・仁徳天皇の時代までさかのぼることができる²⁷⁾と述べている。彼女たちは、上は天皇から下は庶民にいたるまでの幅広い層を客に持ち、歌舞や音曲を演じ、ときには求めに応じて寝所をともにしている。鎌倉時代には、白拍子と呼ばれる男装の舞女で遊女である女性が上流社会の宴会や寝所に招かれるようになる。桃山時代に女歌舞伎を創始した出雲のお国も遊女の一種であったと言われる。いずれの時代にも遊女の化粧は華やかであり、一般の女性の風俗に大きな影響をあたえたと考えられる。出雲のお国の場合は、その演し物を男役は女性に男装をさせ、女役は男性に女装させて演じており、登場人物の髪型が一大流行をつくるほどの人気であった。こうして、化粧は女性にとって、異性であり、生活保障者である男性の目を引く重要な手段として定着したのである。

男性の化粧が、その動機において女性の目を引きたいということにあったとしても、目的はそこに止まらずに自己を演出・表現することの喜びにまで

至っているのに対して、女性の場合の化粧は、巫女の神事用の化粧を別とすれば、いずれも男性の目を引きつけることが動機であり目的であるところに止まっている。

こうした差異が生じたのは、主として、男性と女性の置かれた社会的経済的地位の格差に原因があると言えるであろう。圧倒的に優位に立っていることから、遊び心を持ち、余裕の上に化粧することの可能だった男性と、男性を引きつけることに専念するあまり、化粧の技巧にのみ凝ってしまう女性とでは、化粧に持たせる意味もおのずから異なってくる。先にまとめた古墳時代の男性を中心とした化粧目的の①および②に含められはするが、女性の化粧目的としては新たに⑥生活の手段、という項目を加える必要がある²⁸⁾。化粧をしたからといって、物事がそれほどうまくゆくものでもないが、強迫観念にかられて化粧をやめられないという構造があったし、現在も続いているのである。

おわりに——自己表現の手段としての化粧

化粧の目的としてこれまでに見てきたことをまとめると、①異性の目を引く②権威・権力を誇示する③宗教的・呪術的必要性④自己表現・変身の手段として⑤通過儀礼として⑥生活の手段、などである。

それでは、1980年代における男性の化粧行為はいかなる目的にもとづくのであろうか。

資料1の記事に戻ってみよう。若者を中心に30代、40代の男性にまでわたる化粧品購買層は、他人より目立ちたいという願望、ハンサムで健康に見られたいという願望のもとに、トータル・ファッションとして顔色をつくり、日焼けムラができればそれを隠すという積極的なお洒落行為に精出す姿がここにある。

現代の男性の化粧の目的が、ひとつには、先に挙げた「②権威・権力を誇

示する」に該当する他人より目に立つための手段であることが示されているし、平安時代に、男性たちがより白く、より絢爛に装った動機でもあった自己表現に共通する欲望もあることがわかる。

さて、こうした現代における男性の化粧行為の流行は、〈男になりたくない男〉がふえてきた事態²⁹⁾と無関係には論じられまい。ファッションやヘア・スタイルにおけるユニ・セックス化は化粧にも及んできたといえる。男になりたくない男の増加は、同性愛者ゆえに化粧する男性が誕生したことを示すが、そうした関係を抜きにして、みずからの望む姿（男っぽくない男）へ変身する手段として化粧をするという男性たちもあるだろう。変身願望の実現にあたって従来は女性の行為とみなされていた化粧行為を選択した点に、男性を女性と画していた深い溝が部分的に浅くなった兆を感じとる人々もいる。しかし、この場合も男性はより自律的に行動しているということに注目する必要がある。

女性の化粧行為の目的の中にも変身願望は強く存在するが、その場合も、男性のより自律的な変身願望と比較すると、みずからの喜びとしてというよりも男性の目にどう映るかという点に力点がおかれる傾向が強い。女性の化粧行為は歌の文句にあるような「あなた好み」の容姿になることをめざして行われることが多いのである。古代以来、その社会的な地位の男性に対する低さのゆえに、女性の価値を美しさのみではかる文化が形成されてきたことの影響である。男性も、美醜で価値をはかられる性であったならば、化粧に対する態度はより他律的となっていたであろう。化粧に対する男女の態度を異ならせている最も大きな要因は、この点にこそあると指摘しておきたい。

1960年代から1970年代にかけて高揚した学生運動や労働運動、大衆運動、そしてウーマン・リブ運動は性差別を縮小することに貢献したが、それでもなお、女性の解放は未達成である。男性の化粧行為の歴史は長く、白粉・紅化粧の時期も決して短くなかったにもかかわらず、近・現代において化粧は女性の行為と思われこまれてきた背景には、男性の意のままになる女性を作り

上げる手段のひとつに化粧行為が選ばれ、男性の管理のもとに男性の好む化粧、髪型や衣装が女性に押しつけられてきた男性支配の構造があったのである。

男女の美容行為が量的に均衡するときに到来したならば、質的な差は残っていたとしても、美容行為を通して男性が女性を支配する体制は微弱となる。化粧行為、美容行為はそのとき、女性にとっても、自律的な自己表現や変身の手段となるはずである。

文 献

- 1) 『あさひびーぶる こうや・泉北沿線版』157号, 1987年12月4日付。
- 2) 前掲『あさひびーぶる』7頁。
- 3) 飯島伸子『美容業従事者の健康障害に関する調査研究』『桃山学院大学総合研究所報』9巻1号, 1983年, 「美容業従事者の健康状態と健康管理への態度」『桃山学院大学総合研究所報』10巻1号, 1984年, 「美容業者の仕事と健康」『桃山学院大学総合研究所報』11巻1号, 1985年。
- 4) 朝日新聞, 1986年10月16日付け, 10月22日付けなど。
- 5) 樋口清之『化粧の文化史』国際商業出版, 1982年, 43頁。
- 6) 佐原真『大系 日本の歴史1 日本人の誕生』小学館, 1987年, 17頁。
- 7) 間壁葎子「考古学から見た女性の仕事と文化」森浩一編『日本の古代12女の力』中央公論社, 1987年, 24頁。
- 8) 森浩一編, 前掲書, 口絵写真。
- 9) 和田清・石原道博編訳『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫, 1951年。
- 10) 江馬務『江馬務著作集 1巻』中央公論社, 1975年, 18頁。
- 11) 江馬務『江馬務著作集』11巻, 中央公論社, 1978年, 262頁。
- 12) 江馬務『江馬務前掲著作集』11巻, 301頁。
- 13) 玉上琢彌『鑑賞日本古典文学 9巻 源氏物語』角川書店, 1975年。
- 14) 樋口清之監修「特集一化粧模様」『太陽』1985年12月号, 16頁。
- 15) 佐山半七丸『都風俗化粧伝』高橋雅夫校注, 平凡社, 1982年。
- 16) 石川松太郎編『女大学集』平凡社, 1977年より。
- 17) 樋口清之前掲『化粧の文化史』94頁。

- 18) 飯島伸子『髪の社会史』日本評論社, 1986年。
- 19) ポーラ文化研究所編『モダン化粧史——粧いの80年』所収, 佐々木多聞「新化粧」明治40年。
- 20) ポーラ文化研究所編, 前掲書所収, 「化粧かがみ」『婦人世界』臨時増刊号, 明治40年4月。
- 21) ポーラ文化研究所編, 前掲書所収, オルコック『大君の都』。
- 22) 『理美容年鑑』1983年版。
- 23) 倉塚暉子『巫女の文化』平凡社選書, 1979年, 194頁。
- 24) 佐原真, 前掲書, 298頁。
- 25) 樋口清之『続日本風俗の謎』大和書房, 1985年, 154頁。
- 26) 津田由伎子『斎王』, 学生社, 1980年, 83頁。
- 27) 滝川政次郎『遊女の歴史』至文堂, 1965年。
- 28) 化粧と女性差別の関連については駒尺喜美編『女を装う』勁草書房, 1985年刊の問題提起が鋭い。
- 29) 大島清『オスはどのように男になったか』ちくまライブラリー, 1987年, 236頁。